

第 1579 回（7 月 6 日）

いわての村おこし

（前岩手大学） 窪 谷 順 次

岩手県は北海道に次ぎ、四国 4 県に匹敵する広大な、かつ多様性に富む県土を有し、優れた自然環境という資源に恵まれた豊かな県である。そして県下の市町村ではそれぞれの地域特性を生かした様々な形の地域おこし、村づくりの試みが行われている。岩手県は、まさに地域おこしの先進県といえることができる。

本報告では、これまで私が見聞してきた岩手の実態をもとに、農山漁村における地域おこし、村づくりについて考えるべきことを整理することにする。

（1）地域を客観的に見つめる

自分たちの住む地域の強みと弱みを確認し、強みをフルに活かし、弱みを強みに転化する手立てを工夫する。また自分たちの地域に賦存する資源（物的資源だけでなく、自然条件、立地条件、文化的・歴史的遺産、地域に蓄積された技術等）を十分に把握し、これらの資源を組合せて最大限に活用する。

（2）発想の転換が必要

弱みを強みに転化する、すなわち奥羽山系の豪雪山村における耐雪から克雪、さらには利雪・活雪への試みや寒冷な気象条件を活かした新作物の導入などである。また作ったものを如何に売るか（セールス）から、如何に売れるものを作るか（マーケティング）への視点の転換も必要である。

（3）情報化の進展に対応する

東和町の東京アンテナショップに見られるように、広く早く情報を集め、経済社会の変動を先取りし、これに柔軟に対応するとともに、農山漁村からの発信を重視して、産物だけでなく自分たちの地域そのものの売り込みを積極的に行う。

（4）都市——農村の交流の深化に対応する

外に向かって開かれた農山漁村として、人とモノと情報、文化の双方向の交流を活性化することを通して、都市と農山漁村との共生関係を構築する。

（5）地域産業複合のすすめ

農村といえども農業部門だけでの地域おこしには限界がある。農業と林業、漁業、1・5次産業、地場産業、観光・リゾート産業、レクリエーション部門等々と有機的に結びつけて、異業種が結合した地域産業複合を形成する。その狙いは、素材型産業である農林漁業のサービス化の深化であり、地域全体として付加価値を高め、地域内での経済循環を強めることによる地域経済の活性化である。

（6）スモール イズ ビューティフルを提唱する

地域おこしは大きいことだけが能ではない。それぞれの地域に合ったサイズの、手づくりの顔が見える、個性のある地域おこしを考えるべきである。多品目少量生産の産地、農村型リゾート、自分たちの農産加工やクラフト産業など地域それぞれの特徴を活かした地域おこしを考えるべきである。

（7）人・組織づくりと高齢化への対応

地域おこしの根幹は人づくりにある。人づくりには地域の後継者、担い手づくりを重視すべきであり、また人的ネットワークづくりの視点が必要である。それは異業種間、地域内外にわたるネットワークを考えるべきである。また高齢化社会への対応として、老人の知恵と経験と技術を村づくりに活用できるような環境を整えるべきである。